国語（その一）

第一問 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「美術家の覚悟」という講演のなかで(注)天心は「凡庸の職工人たるに至りては、何等の点にか特殊の尊敬を払うべき」と主張していた。天心は「美術家」と「職人」、あるいは「工人」とをはっきりと区別し、「工人」を「米櫃のために制作をする人」として、はっきりとおとしめる言い方をしている。

しかし「工人」、あるいは工人が作り出す「工芸」は低い価値しか持たないのかというのは、深く考える必要のある問いであろう。たしかに「芸術のための芸術」、つまり他の目的のために作りだされる芸術ではなく、純粋に芸術的・創造的意欲から生みだされる芸術にこそ価値があるという考え方もある。そこには一理あるが、しかし生活のなかにある工芸のなかにもまた美が存在するのではないだろうか。

そのことをとくに主張した人に柳宗悦がいる。柳は名もなき職人が作り、民衆がその日々の暮らしのなかで用いている器や家具、織物の美に注目し、「民衆的工芸」、つまり「民芸」の価値を再認識し、手仕事の文化を守り育てる運動、いわゆる「民芸運動」をリードした人として知られる。その代表的な著作の一つである『工藝文化』（一九四二年）のなかで柳は、美術を上に置き、工芸を下に置くような見方に、明確な反対の声を挙げている。

『工藝文化』のなかでも言われているが、絵画や彫刻はもともと生活と密接に結びついたものであった——「生活」のなかには衣食住だけでなく、宗教に裏打ちされた生活をも含めて考えてよいであろう——。そこでは作り手の創意ということよりも、生活上の必要性の方が、より大きな意味をもっていた。そういう意味で、もともとはすべての絵画や彫刻が工芸性を有していたと言ってもよい。つまり「美術」というもの、言いかえれば、A見るためだけに描かれた絵や、見るためだけに刻まれた仏像というものはなかったのである。

近世における個人の自覚——柳は「我の自覚」という言い方をしている——を経て、はじめて「美術」が生まれたと言うことができる。個人の創意（creativity）に基づいて、あるいは画家自身の個性を表現するために絵を描くということがなされたのである。

そのように見るために描かれ、刻まれるということ、言いかえれば創作が［イ］なものになるとともに、美術と工芸とが分離したのである。そして美のためにという「純粋性」の故に、美術が上位におかれ、生活のためにという「不純性」の故に、工芸の方は下位に置かれた。

それに対して柳は、生活と結びついた美は、ほんとうにおとしめられるべきものであ

国語（その二）

ろうかという問い直しを行ったのである。

x

近世、あるいは近代における個人の自覚に基づいた天才の芸術においては、個性的なもの、卓越したもの、非凡なもの、日常性を超えたものが価値のあるものとされた。言いかえれば、強烈なもの、刺激の強いものが美とされた。そういったものをあえて作りだすところに芸術の意義が見いだされたと言うことができる。

それに対して柳は、本当の意味で人間を幸福にするものは、そのような偉大な美ではなく、生活のなかに現れる「尋常の美」ではないのか、ということを主張したのである。もちろん柳も天才の偉大な美を否定しようとしたわけではない。そうではなく、それとともに、「個人の泉からは発しない美」というものがあるのではないか、ということを言おうとしたと考えられる。

偉大な天才的芸術家が生みだす美は、道にたとえれば、凡人が決して歩むことのできない険阻な道である。それに対して、工芸品がもつ美は、誰でも行くことのできる平坦な道である。もちろんそれなりのものを作り出すためには修業が求められるが、しかし、修業さえ積めば、天才でなくてもその美を生みだすことができる。そういう観点から言うと、天才が歩む険阻な道は、むしろ「傍系の道」であって、工芸品の美の方が、「美の大道」なのではないか、ということを柳は主張しようとしたのである。

柳のいわゆる民芸運動も、そのような考え方に基づくものであったと言ってよいであろう。一九四一年に発表した『民藝とは何か』を手がかりに民芸運動が何であったかを見てみたい。

まず最初に柳はその「序」のなかで、民芸品、あるいは工芸品は「雑なもの」と受け取られる場合が多いが、そういうふうに受けとられる原因の一つが自らにあること、つまり、柳自身が使った「下手」な品と「上手」な品ということばがその原因の一つになったことを記している。そういう受けとられ方に反論したいという意図がこの書に込められていたと言ってよいであろう。

柳が主張しようとしたのは、貴族などの富裕な人々が使った「上手」な品——たとえば複雑で繊細な技巧を凝らした蒔絵・螺鈿細工のようなものを例に挙げることができるであろう——だけではなく、一般庶民が日々の暮らしのなかで使う「下手」なもののなかにも美があるということであった。民芸運動の広がりとともに、この「下手」ということばも広く知られるようになったが、しかしそれがいま述べたような柳の意図通りに受け取られず、たとえば「下手物趣味」というようなことばが作られて、いっそうその美が否定されるようなことが起こったのである。そういうことがあり、柳はそれ以後、

国語（その三）

この「下手物」ということばを使うのをやめ、Bもっぱら民芸とか民器ということばを使うようにしたと述べている。

柳は民芸のなかにどのような美を見いだしていたのであろうか。『民藝とは何か』のなかで柳は、「上手物」の特徴である複雑で繊細な技巧、あるいは顧客の注意を引こうとする作者の意図、作為性と対比して、民芸の美について次のように語っている。「無駄をはぶいた簡素、作為に傷つかない自然さ」にこそ民芸の美はあると柳は言う。前者の特徴が「有想（うそう）」にあるとすれば、後者の特徴は「無想」にあるとも述べている。「上手物」を作る人は、そこに自分の意図を、あるいは独創性を込めようとする——それが「有想」である——。それに対して「下手物」を作る人は、そういう意図をもっていない。一般の人々の生活にいちばん役立つようなものを作るだけである。それを柳は「無想」ということばで表現したのである。そこでは複雑さや奇抜さよりも単純性が、華やかさよりも質素さが、繊細さよりも堅牢（ろう）さが旨とされる。

C民芸運動とは、そのような単純で質素で堅牢な日々使われる民芸品ないし工芸品のなかに美があるという認識を広めようとする運動であると言うことができる。柳が一九二六年に河井寛次郎らとの連名で発表した「日本民藝美術館設立趣意書」——この趣意書の発表が民芸運動の始まりと言われる——の表現で言えば、「美が自然から発する時、美が民衆に交（まじわ）る時、そうしてそれが日常の友となる時」を実現しようとする運動であったと言うことができるであろう。

（藤田正勝『日本哲学入門』による）

（注）天心　——美術界の指導者、岡倉天心（１８６２～１９１３年）。

※　問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

問一　傍線部A「見るためだけに描かれた絵や、見るためだけに刻まれた仏像というもの」とあるが、これらはどういうものであるのか。本文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

問二　空欄**イ**に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 所与的　② 合理的　③ 自律的　④ 相対的　⑤ 象徴的

国語　（その四）

問三　［　X　］に入る、次の**ア**～**オ**の五つの文の正しい並べ方として最も適切なものを、後の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

ア　この表現は禅からとられたものである。

イ　たとえば『臨済録』において「無事はこれ貴人（きにん）、ただし造作することなかれ」という表現がある。

ウ　そういう問い直しの根底にあったのは、柳の独自の美の理解であった。

エ　それを柳はこの著作において「無事の美」と表現している。

オ　無事の境地にすむ人こそ貴いのであり、強いて事を作為するようなことをしてはならない、という意味であるが、このようなことばを踏まえて「無事の美」ということが言われている。

①　**ウ→イ→オ→ア→エ**　②　**ウ→イ→エ→オ→ア**　③　**ウ→エ→ア→イ→オ**

④　**エ→ア→イ→オ→ウ**　⑤　**エ→ウ→ア→イ→オ**

問四　傍線部**B**「もっぱら民芸とか民器ということばを使うようにした」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

①　「下手物」ということばはとても品が悪くて、洗練された美しさを伝えることができないから。

②　「下手物」ということばでは、民芸品が持っている「尋常の美」を伝えることができないから。

③　「下手物」ということばだけが周知されて、「民芸運動の理念」を伝えることができないから。

④　「下手物」ということばでは、「上手」な品と比較されて、良さを伝えることができないから。

⑤　「下手物」ということばでは、「雑なもの」が持つ親しみやすさを伝えることができないから。

問五　傍線部**C**「民芸運動」とあるが、これはどのような運動なのか。本文中から三十字以内で抜き出して答えなさい。

国語（その五）

問六 本文では「工芸品」とはどのようなものだと説明されているか。五十字以内（句読点なども字数に含む）で答えなさい。

問七 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 柳宗悦は、工芸を不純なものと捉えるのではなく、純粋なものと捉えるべきだと主張していた。

② 柳宗悦は、個人の自覚に基づいた天才の芸術を否定し、名もなき一介の職人の作品を称賛した。

③ 柳宗悦は、美術と工芸とを分離し、工芸こそが近代西洋の芸術として評価すべきだと考えていた。

④ 柳宗悦は、独創性などが込められた作品ではなく、自然さを持った民芸品を世に広めようとした。

⑤ 柳宗悦は、天才が複雑で繊細な技巧を凝らし、顧客の注意を引こうとしていると批判していた。

国語（その六）

第二問 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

ビジネスの場面においては、基本的に、客観的な情報を多く集めることで、未来予測の①セイドを高め、優れた意思決定をしようと考えます。しかし、最近の経営学、認知心理学、神経科学では、A意思決定には主観的な要素も必要だと結論づけられています。なぜなら、客観的な情報には一定の割合で必ず「過去の情報では正しく、同じ環境では再現できるが、環境が少し違えば当てはまらない論理」が存在するからです。これは「バイアスとバライアンスの［イ］」と呼ばれています。主観的な要素が多いほどバイアスによるエラーが多くなるが、客観的な要素が多くなると今度はバライアンス（予測のばらつき）によるエラーが多くなるというものです。特に経営においては、わずかな環境の変化で市場が大きく変わる可能性がある状況で意思決定をすることが多いため、客観的情報の積み重ねだけではたどり着けない未来があるのです。

そのため、特に不確実性が高い環境であればあるほど、客観的な情報に加えて主観的な判断も求められます。かつて、吉田松陰がのちに日本の歴史を変えていく弟子たちに対して「諸君、狂いたまえ」と言ったことは有名ですが、「狂う」とは、B周りの常人には理解できないほどの「主観による行動をせよ」ということです。これが主観ではなく客観的・論理的に説明できるのであれば狂うことにはならず、弟子たちが歴史を大きく変えることもなかったでしょう。特に不確実性が高かったであろう明治維新の時代において吉田松陰が発したメッセージが主観を強調したものだったことは印象的でした。

私が起業したとき、客観的な情報としては「(注1)ゲノム解析サービスについて海外ですでにいくつかの成功事例があること（特にアメリカの23andMeというゲノム解析サービスの会社は現在までに１０００万人分以上のキットを売るほどのヒットとなっています）」、また「市場規模が大きく伸びていること」「一定数のサンプル数が集まれば統計学的な解析が可能になり応用領域が広まること」「解析結果から疾患予防や創薬などの経済価値を生み出しうること」などを集めることができました。

ただし当時は、ゲノム情報を使ったビジネスはまだ世界中でビジネスモデルが確立されておらず、模索している(注2)フェーズでした。倫理的にもビジネスとしてやっていいこととやってはいけないことの線引きが不明確で法律も整備されておらず、たとえば23andMeに関しても、アメリカ食品医薬品局（ＦＤＡ）による規制のため、一時は疾

国語（その七）

患リスクなどの解析結果の提供を停止し、祖先解析の結果を提供することしかできなくなったこともありました。また、ゲノム解析を行ってもどのような結果が出るかはわからないため、本当に経済価値を生み出す成果が得られるのかは不透明だったのが実際のところでした。加えて、国内の実績に限れば成功事例はまだゼロで、客観的に見れば、手を付けないための情報や理由もいくらでも集められたのです。

【Ⅰ】

事業を立ち上げる理由と立ち上げない理由を多く集めてc天秤（びん）にかけることは可能ですが、事業がどのように広がってどのような成果が得られるのかは、究極的には誰にもわかりません。私の場合も、結局のところ最後には「ゲノムの持つ可能性を信じる」という私の主観をもって事業を始めることになりました。特に変化が大きく予測できない環境においては、最後に決断する決め手になるのは主観です。

【Ⅱ】

ここで大事なのは、主観だけが大事というわけでは決してなく、何が客観で何が主観なのか、お互いの②ホカン関係を明確に認識しておくべきだということです。

【Ⅲ】

「客観的な情報ではこのような可能性があるが、自分がやり切りたいという主観的な強い気持ちもあります」と切り分けて説明できるとより強い説得力を持ちます。個人の人生における決断も同様です。

【Ⅳ】

一方で予測可能性が高い環境では、冷静に収集した客観的な情報が武器となります。まず扱う意思決定が予測可能性が低い領域か高い領域かを見極め、もし高い領域だと考えるならその理由もしっかり説明することが、望む未来へと向かう上では重要となります。

【Ⅴ】

「この手段を使い、こういう未来を作りたい」という主観は、起業の世界においては「ストーリー」と呼ばれているものです。ストーリーは、単に「これを実現する」というゴール地点だけを指すものではありません。過去から現在における問題点を明示しつつ、「どういう手段を使ってどの課題を解決し、どういう未来を作りたいのか」という、主観も含めた一連の流れを指すものです。単に「これを実現する」という目標地点を掲

国語（その八）

げるだけでは、客観的な指標を③ヒロウする上では確かに有効ですが、D人を惹きつけることはなかなかできません。

たとえば、(注3)ＢＭＩが30以上の人は子どもを含めて世界で約７億１０００万人、世界の人口の約10％を占めます。これに対して「肥満人口を１億人に減らします」というのは、一つの課題設定としては正しいでしょう。しかし、この数字だけを聞いて、この課題解決に協力しよう、資金を提供しようと考える人は少ないのではないでしょうか。

ここで、「肥満人口を１億人に減らすことで、糖尿病による人工透析や足切断を④ヨギ無くされる人々を減らし、多くの人がより自由に活動できる社会を作りたい」と掲げると、そこに主観的な情熱が乗るようになります。糖尿病やそれに付随する疾患の辛さを回避したい、より自由に活動できる人を増やしたい、という想いに共感する人は多いでしょう。

そもそも課題というものそれ自体が、主観から生まれるものです。そのため、他者を巻き込んでより良い未来に進む上では、主観を乗せてストーリーとして語ることが欠かせません。むしろ、「肥満人口を１億人に減らします」というのは単なる数値情報であって課題ではなく、課題はその先にどのようなストーリーが描かれるかから初めて定義される（より自由に活動できる人々が増えるというストーリーがあるから初めて肥満人口を減らすことが課題となる）ものなので、ストーリーがない課題は存在しないはずです。

（高橋祥子『ビジネスと人生の「見え方」が一変する生命科学的思考』による）

（注１）ゲノム ―― 生物の持つ遺伝情報を表している概念で、いわば生命の設計図のようなもの。

（注２）フェーズ ―― 局面。

（注３）ＢＭＩ ―― 体重と身長から算出される肥満度を表す体格指数。

※ 問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

国語（その九）

問一 傍線部①～④のカタカナを漢字で書きなさい。

問二 傍線部A「意思決定には主観的な要素も必要だと結論づけられています」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 論理性に欠けるところでは、主観的な判断により、よりよい安定的な対応をする必要があるから。

② 効率性を上げる必要がある環境では、主観的な判断により、適切な対応をする必要があるから。

③ 流動性のあるところでは、主観的な判断により、その流動性を固定し対応しなくてはならないから。

④ 偶然性を排除できないところでは、主観的な判断により、絶対的な対応をする必要があるから。

⑤ 不確実性が高い環境では、主観的な判断により、予測できない事態に対応しなくてはならないから。

問三 空欄**イ**に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① パラドックス ② ジレンマ ③ リスク
④ トラウマ ⑤ タブー

問四 傍線部B「周りの常人には理解できない」とあるが、常人には理解できない言動をとるという意味を持つ慣用句を書きなさい。

問五 傍線部C「天秤にかける」とあるが、この言葉の辞書的な意味として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 未来を予想する ② 内容を吟味する ③ 根拠を確認する
④ 優劣を比較する ⑤ 差異を強調する

国語（その十）

問六 次の一文を挿入する場所として最も適切なものを、後の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

たとえば、新規事業を進めたいから意図的に有利なデータを集めてしまうとか、逆にやりたくないから類似の失敗事例を集めるなど客観と主観を混ぜてしまうと、何に基づいて判断しているのかわからなくなり、意思決定をしづらくなります。

① 【Ⅰ】　② 【Ⅱ】　③ 【Ⅲ】　④ 【Ⅳ】　⑤ 【Ⅴ】

問七 傍線部D「人を惹きつけることはなかなかできません」とあるが、人を惹きつけるためにはどうすることが必要なのか。本文中から二十字以内で抜き出して答えなさい。

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 歴史を大きく変えるためには、合理的なやり方ではなく、論理が破綻した行動をとらなくてはならない。

② どういう手段を使って、どの課題を解決するかを明確に提示できれば、他者の協力を得ることができる。

③ 客観的な情報に頼りすぎると、かえって間違うこともあるので、主観的な意思決定が必要なときもある。

④ 個人の人生とは違い、ビジネスの世界では、利益を上げる必要があるため主観的な要素が必要とされる。

⑤ 主観的な情熱をもって起業すれば、どんな事態に直面しても、頓挫することなく成し遂げることができる。

国語（その十一）

第三問 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

あらためていうが、スポーツには「厳しさ」が必要である。できないことができるようになるためには、いまの自分の能力をフルに発揮してもできないことへの挑戦が、欠かせないからだ。スポーツにかぎらず、「できない」から「できる」、あるいは「わからない」から「わかる」への①チョウヤクには、相応の困難がついて回る。成長を望むのであれば「厳しさ」から目を逸らしてはならず、イ 乗り越えるべき壁として歓迎すべきである。

できないことができるようになる、わからないことがわかるようになるためには、この壁をなんとかよじ登らなければならない。

だが厄介なことにこの壁は、てっぺんが見えない。どれほどの努力をすれば乗り越えられるのか、その見通しが立たない。わずかなくぼみを見つけてそれに手をかけ、着実に、淡々と登るうちに、ふと気がつけば壁の向こう側に降り立っている。上達とはそういうものだ。「二時間の練習を一週間つづければよい」というような定量的な努力ではなく、いつどこにたどりつくのかはわからないままに、ただ目の前のことに取り組むという、まるで暗闇を手探りで進むようなあがきが必要となる。

視覚が働かない暗闇では、見えないことからくる不安や恐怖と向き合わなければならない。その情況で前に進もうとすれば、視覚以外の五感は研ぎ澄まされる。微かな音を聞き分け、わずかな匂いを感知し、風の流れや温度の変化を肌で感じながら、やや前屈みになって摺り足で進むしかない。

このあがきを通じて潜在能力は開花する。限界を越えるためにジタバタとするプロセスを経て、意識されず潜んでいた能力は顕在化する。

見通しが立たないにもかかわらず、手足をばたつかせる。この「あがき」こそが身体能力を高めるうえでは欠かせない「厳しさ」である。

「 甲 」や「火事場の馬鹿力」という俚諺があるように、追い込まれた状態でなんとか生き延びようとするのが生物であり、人間だ。誰も助けてくれず、自分ひとりの才覚でどうにかする以外に生きる道はないという情況になれば、生物としての人間は潜在能力を爆発的に発現させる。

生物学的装置ともいえるこのメカニズムを肌身で知る経験者は、選手につい「厳しさ」を求める。たとえそれが炎天下や暴言、暴力であっても、ある程度は必要なのだと否定しない。むしろ結果的に選手の潜在能力を開花させるのだからと、肯定する。

国語（その十二）

だが果たしてそれでいいのか。

思想家・武道家の内田樹（たつる）氏は、人としての尊厳を顧みず、人格を全否定して追い込むスパルタ教育では「胆力がつかない」という。

たしかに人間を追い詰めると、恐怖や苦痛や不条理に対して「鈍感」にはなる。でも、入力に対して鈍感になることと「胆力がある」ことは違う。胆力があるというのは、極めて危機的な状況に陥ったときに、浮き足立たず、恐怖心を持たず、焦りもしないこと。どんなに破局的な事態においても、限定的には自分のロジックが通る場所が必ずあると信じて、そこをてがかりにして、怒りもせず、絶望もせず、じわじわと手をつけてゆく。とんでもなく不条理な状況の中でもむりやりに条理を通していく。胆力とはそういう心構えではないかと僕は思っているんです。頭に血が上って鬼になってしまうということと胆力があるということは方向がまったく違う。

「厳しさ」を乗り越えれば、人としてタフになる。だが、そのタフな人間には、二通りあると内田氏は指摘している。

「胆力がある人」と「Ａ鈍感な鬼」である。

理不尽だらけの「厳しさ」では胆力が身につかず、感性が鈍く感情が制御できない鬼を育てることになるというこの見立ては、実に的を射ている。心身ともに追い込まれた情況で身につくタフさには、こうした負の側面があることを、私たちは自覚しておかなければならない。

恐怖や苦痛、不条理を感知する力は誰しもに備わっている。怖いと感じるからこそ慎重に事に当たれる。苦痛や不条理は取り除かなければ、時間とともに心身は擦り減ってゆく。

鈍感な個体は身に迫る危険を感知できない。怖いもの知らずの無鉄砲さは大怪我（けが）を招き、歯を食いしばって耐える状態は、徐々に生命エネルギーを②コカツさせるからだ。恐怖や苦痛、不条理を感知する力は、生きる力そのもの。恐怖や苦痛、不条理をなんとか解消すべく、感情を制御しながら思考を重ねつつ粘り強く事に当たる。そうすることで私たちは生きる力を高めることができる。

内田氏のいう胆力は、この生きる力と重なり合う。

「厳しさを乗り越えてこそ成長できる」のは、確かにそうである。生ぬるい環境で人が育たないのは、③マギれもない事実だ。ただ、だからといって、理不尽さで心身を追

国語（その十三）

い込み手っ取り早くこしらえた「厳しさ」を、選手に課すのはちがう。「鈍感な鬼」に育つからだ。そうではなく、胆力すなわち生きる力が身につくような質の高い「厳しさ」を、模索する。これが、これからのスポーツの課題だ。

頭がボーッとするほどの酷暑下で、なぜ練習や試合を行うのか。

④タイクツな反復練習を押しつけるだけの一方的な指導は、スポーツ指導と呼べるのか。

痛みが激しく十分にパフォーマンスができないにもかかわらず、無理をして試合に出なければいけないのはなぜか。

心がこもっていないかたちだけの挨拶に、意味はあるのか。

なぜ丸刈りにしなければならないのだろう。

たかだか数年長く生きているだけで、そんなにエラいのか。

はじめたばかりのころに感じていた楽しさは、いつ失われたのだろう。

指導者を怖がりながらプレーするのは、おかしくないか。

レギュラーになるには、仲間を蹴落とさなければならないのだろうか。

恐怖や苦痛や不条理を前にして葛藤する選手の内面を、忽(ゆるが)せにしない。安易な解決法を与えず、自らの力で乗り越えるための「余白」を、全力で確保する。選手が自ら導き出した結論を尊重し、B自発的にその一歩を踏み出すまで、じっと待つ。こうした気配りのうえに築かれる〈厳しさ〉をこそ、私たちは追求しなければならない。ただでさえ、選手は暗闇のなかを歩くようなc<u>もどかしさ</u>を感じている。［ロ］、それに寄り添い、励まし、ときに叱咤(たた)する。この絶妙な匙加減(さじかげん)に、傍(かたわら)に立つおとなが心を砕けばスポーツは変わる。

D繊細かつ大胆な人物が育つ。そんな〈厳しさ〉を、追求しなければならない。感性を鈍磨させ、生きる力を削(そ)ぐ「厳しさ」の元凶である酷暑や暴力などは、もってのほかである。

（平尾剛『スポーツ3.0』による）

※ 問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

国語（その十四）

問一　傍線部①～④のカタカナを漢字で書きなさい。

問二　空欄**イ**、**ロ**に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

①　さらに　　②　ところが　　③　だから　　④　むしろ　　⑤　つまり

問三　空欄**甲**に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

①　角を矯めて牛を殺す　　②　負け犬の遠吠え　　③　雨垂れ石を穿つ
④　羹に懲りて膾を吹く　　⑤　窮鼠猫を嚙む

問四　傍線部**A**「鈍感な鬼」とあるが、なぜこのような鬼になってしまうのか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

①　できないことをできるようにしようという思いから、無理無体な練習を課してしまったから。
②　自分の現在の能力をフルに発揮してもできないことに、無謀にもチャレンジしてしまったから。
③　練習すれば潜在能力がかならず開花するという間違った認識のもとで、練習に励んでいたから。
④　感性が鈍くて感情を制御するだけの能力を持っていないのに、胆力を身につけようとしたから。
⑤　はっきりとした目的や目標を持つことなく、ただ何となく練習を続けているだけであるから。

問五　傍線部**B**「自発的」とあるが、これの対義語を「発」を用いずに漢字三字で答えなさい。

国語（その十五）

問六 傍線部**C**「もどかしさ」とあるが、「思うようにならなくて、もどかしいこと」という意味を持つ四字熟語になるように、次の空欄に漢字二字を入れなさい。

□□（そうよう）掻痒

問七 傍線部**D**「繊細かつ大胆な人物が育つ」とあるが、このような人物を育てるためには、どのような「厳しさ」が必要なのか。次の空欄に入れるのに最も適切なものを本文中から十五字以内で抜き出して答えなさい。

□□□□□を養成する「厳しさ」

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 自己の限界を超えるための方法を自力で考え出すことをはじめ、選手はすべてを独力で行う必要がある。

② 優れたパフォーマンスをするためには、タフな選手ではなく、感性豊かな選手にならなくてはいけない。

③ 生ぬるい環境で人が育たないのは事実であるが、どのような質の「厳しさ」を与えるかが問われている。

④ 暴言を吐き、暴力をふるうような指導者ではなく、ただただ選手に寄り添う指導者が求められている。

⑤ 勉強ではなくスポーツにおいては、人格を否定して、選手を追い込むスパルタ方式は否定されている。